

林業技術センター
普及班便り
(第35回)

いわての林業人 14

一 はじめに

今月の普及班便りでは、岩手の特
用林産の担い手として、矢巾町で原
木生しいたけの生産に取り組む立花
正さんをご紹介します。



立花 正さん

二 人物紹介

立花さんは昭和47年に栽培を始
め、現在のご家族3人で生産にたず
さわる傍ら、「マッシュユエキスパ
ークラブ」の一員として、首都圏へ
の直販や、若い生産者の指導にも力
を入れておられます。

三 仕事の状況

(1) 栽培の流れ

年間の植菌本数は5万3千本で、
自動植菌機を使います。種菌は、季
節に合わせて8品種を使い分けてい
ます。仮伏せはハウス、本伏せは屋
外の平坦地(裸地)とハウスで行な
います。本伏せ中は遮光、散水で菌
を回し、早い物では植菌当年から発
生させます。収穫後は休養↓浸水↓
芽出しの工程を経て、再び収穫。1
年で6〜7回収穫し、廃ホダ木はハ
ウス暖房用の燃料に使っています。
また、「ホダ木を動かす回数をでき
るだけ減らす」ことを目的に、作業
工程の改善にも取り組み、自動植菌
機の他にも鉄棒やフォークリフトを
積極的に導入しています。

(2) 販売

生産物は、農協、近郊の産直のほ
かに、マッシュユエキスパークラブ、
JA研究会メンバー、一般生産者で
組織された「いわて原木椎茸生産者
の会」(通称「めんめじゃの会」)に
より、関東のイトーヨーカ堂に出荷
されています。現在でこそ出荷は順
調ですが、当初は「自分たちも腹を
切り」赤字覚悟で、2年間は頻繁に
店舗へ足を運ぶなど、販路の開拓者
として並々ならぬ苦勞を重ねられた

そうです。

(3) こだわり

食品も外見で評価されることが多
い昨今ですが、立花さんは「味が第
一」と言い切り、種菌も自分で試食
をしてから選んでいます。勿論、「安
全・安心」の確保は大前提。生シイ
タケ市場での原木栽培品の割合は高
くはありませんが、その味には東京
の業者も惚れ込んだとのこと。
「担当者・売り子さんに愛されるこ
と、儲けさせることが重要なので、
高くても売れる商材を作るよう努力
している」とおっしゃっていました。

(4) 考えていること

近年、情報発信の手段が増え、流
通経路の選択肢も広がりましたが、
立花さんは、「原木生産、しいたけ
栽培、販売を1つのユニットとして
捉え、地域毎にこのユニットを形成
または再生して、ユニット間で連携
することで、岩手の良さを活かせる」
と考え、賛同者を求めています。ま
た、栽培面では、初期の加温に頼っ
たホダ木を見直し、最後まで活力を
保てるホダ木作りに取り組んでいま
すが、乾しいたけのホダ木作りも参
考にされているとのことでした。さ
らに、若い生産者の意識と技術の向

四 おわりに

普及班便りでは、これからも森林・
林業に携わるさまざまな方々を紹介
していきますので、皆様の地域で活
躍されている方をお知らせくださ
い。また、この4月に普及班のメン
バーが全員入れ替わりました。よろ
しくお願ひします。

林業技術センター普及班



芽切ったホダ木

上にも目を向け、「今年は行政・メ
ーカーとタイアップして研修を行ない
たい。」と熱く語りました。